

〈研究ノート〉

副読本を活用した総合的な学習による学習効果と実践上の課題 —「宇治学」副読本活用に係る実施状況調査を基に—

橋本 祥夫*¹

Key words : 総合的な学習の時間, 副読本, 地域学習

1 はじめに

平成 29 年に改訂された学習指導要領で、総合的な学習の時間（以下、総合学習）は、探究的な学習を一層重視することが求められている。しかし、探究的な学習をどのようにすればいいのかわからない教員も多い。副読本を作成する前に宇治市教育委員会が実施した総合学習の実施実態調査（2014）によれば、総合学習で十分な探究的な学習が実施されていないという学校が見られた。望月（2017）は、「授業時間数に幅を持たせ具体的な授業の進め方を例示することで、総合の実践に馴染みが無い学校でも、その学校の実態に合った独自の教育実践を行うことができる」と指摘している。

京都府宇治市では、宇治市教育委員会と京都文教大学の教員で研究グループをつくり（研究代表者：橋本祥夫）、全市の小中学校の総合学習を「宇治学」とし、その充実を図るために共通教材としての副読本を作成し、探究的な学習を実践するための単元計画や教材の開発を行った（橋本ら、2016）。その後、2017 年度に第 1 期となる 3 年生と 6 年生の副読本が完成した段階では、副読本を使った学習をするにあたり、児童を対象とした質問紙調査を行い、「宇治学」を実施するためにどのような課題があるのかを

検討した（橋本、2018）。

副読本を使って総合学習を実施することについては、研究グループでは検討段階から懸念があった。それは、総合学習が地域や児童の・生徒の実態に応じて実施する学習であるため、全市共通教材としての副読本は総合学習では使いにくいのではないかとということである。また、地域学習の副読本を作成している他の自治体の例では、作成して配布しても、活用するかどうかは学校の判断にゆだねられ、実際には活用があまりされていない例（千葉県、川崎市、久留米市など）もある。

2 研究目的

総合学習で副読本を活用することにより、指導者は児童・生徒にどのような学習効果があると考えているのか、また、実践上どのような課題があると考えているのかを明らかにする。

3 実施状況調査の概要

3-1 調査の対象と方法

調査は、第 1 期として、3 年生と 6 年生の副読本の使用が開始された 2017 年度末に、宇治市内の全小学校（22 校）を対象に実施した。本研究は宇治市教育委員会との共同研究であり、学校への依頼は宇治市教育委員会が行い、すべての学校から回答を得た。なお、調査用紙は 3 年生用と 6 年生用の 2 種類があり、それぞれ

*¹ Yoshio HASHIMOTO
京都文教大学

の学年担当が回答した。

3-2 「宇治学」の学習内容

小中一貫教育で行われる「宇治学」は、第 3 学年から第 9 学年の各学年それぞれに共通テーマが設定されている。第 3 学年は「宇治茶」、第 4 学年は「自然(生活)環境」、第 5 学年は「地域福祉・ノーマライゼーション」、第 6 学年は「地域の魅力」、第 7 学年は「防災・減災」、第 8 学年は「キャリア教育と自分の生き方」、第 9 学年は「未来の宇治」である。

3-3 調査の内容

調査項目は以下の 6 つである。①副読本を活用した学習の期間、総時間数、②「課題設定」においてどのような体験活動をしたか、③「情報収集」においてどのような方法で学習をしたか、④「整理・分析」においてどのような思考ツールを活用して学習をしたか、⑤「まとめ・表現」においてどのような方法で学習をしたか、⑥副読本を活用した学習を終えての児童・教員の変容、実践上の課題や外部人材や地域の施設等、また、副読本・指導の手引き・ワークシートについての感想である。

本稿では、⑥の項目に焦点を当て、分析を行った。なお、全回答数は 22 校の 2 学年分で 44 である。回答は自由記述だが、内容を分類し、カテゴリーごとに集計した。なお、小規模校 1 校が副読本を活用した実践をしていないため未回答である。また、項目によっては未回答の学校もあった。

4 結果と分析

4-1 児童の変容

本研究グループでは、「宇治学」の目標と育てたい力を明確にし、育てたい資質・能力を「学習方法に関すること」で 4 項目、「自分自身に関すること」で 4 項目、「他者や社会とのかかわりに関すること」で 3 項目設定した(橋本, 2018)。自由記述の回答を、「宇治学」で育

てたい資質・能力に当てはめて、分類した(表 1)。

表 1 児童の変容(筆者作成)

| | 資質・能力 | 3 年 | 6 年 |
|-------------------|---------|-----|-----|
| 学習方法に関すること | 課題発見・設定 | 4 | 6 |
| | 情報収集・分析 | 5 | 3 |
| | 思考判断 | 0 | 3 |
| | 表現・省察 | 4 | 5 |
| 自分自身に関すること | 意思決定 | 1 | 2 |
| | 計画実行 | 3 | 0 |
| | 自己理解 | 1 | 0 |
| | 将来・展望 | 3 | 1 |
| 他者や社会とのかかわりに関すること | 他者理解 | 0 | 0 |
| | 協働・共生 | 0 | 1 |
| | 社会参画 | 0 | 0 |

最も多い回答は、「課題発見・設定」に関する回答(10 回答)だった。6 年生では最も多い回答(6 回答)である。主な意見として「宇治には歴史と深いかかわりがあることを実感できた」「宇治のすばらしさについて新たな発見ができた」という意見があった。副読本では、「課題設定」のところを重視している。「情報収集」、「整理・分析」、「まとめ・表現」のところは、学習方法の事例となるため、具体的な情報は少ない。しかし、「課題設定」では、まず宇治について知ってほしい情報を示し、指導の手引きでも詳しく解説している。そうしたことから、「課題設定」のところで特に副読本が活用されていると考えられる。

次に多い回答は、「表現・省察」に関する回答(9 回答)である。主な意見として「宇治市に対する興味・関心が高まるとともに、新聞等を作成して学級で発表することができるようになった」「発表が苦手だった児童が、発表が楽しかったといえるほど充実した取り組みができ、達成感につながった」という意見があった。

「宇治学」の指導計画では、各学年共通して、「まとめ・表現」の時間数を多くしている。「宇治学」では、振り返りの時間を重視し、学んだこと可能な限り地域に発信することを通して、地域とともに「ふるさと宇治」について考える学習としている。また、回答意見に見られるように、副読本の学習を通して充実した学習ができれば、発表も意欲的にできるようになると言える。

三番目に多い回答は、「情報収集・分析」に関する回答（8 回答）である。3 年生では最も多い回答（5 回答）である。主な意見として「資料としても活用でき、内容を理解し、次の意欲につながられた」「調べ学習の仕方が見えてきたようで、抵抗が少なくなってきたようだ」という意見があった。

特に 3 年生では、どのように調べたらいいのか分からないことが多い。3 年生の調べ方として、見学や体験活動を重視している。また、インタビューをすることにしており、インタビューの仕方を事例として紹介している。副読本を通じて、調べ方が理解できた学校が見られたことが分かる。

資質・能力で最も多い回答は、「学習方法に関すること」（30 回答）である。上位 3 位がいずれも「学習方法に関すること」である。「思考判断」に関する回答は、3 年生ではなかったが 6 年生は 3 校の回答があった。主な意見としては「収集した情報の整理の方法を学ぶことができた」「整理・分析のイメージがずいぶん明確になったようで、指導者の支援が最小限に留まった」という意見があった。「宇治学」では整理・分析で思考ツールを活用するようにしており、6 年生段階では思考ツールを活用した整理・分析が効果的に行われていることが分かる。

「学習方法に関すること」が最も多いことから、副読本に活用による資質・能力としては、

「学習方法に関すること」が最も効果的だったということが言える。「他者や社会とのかかわりに関すること」の回答は少なく、「協働・共生」で 6 年生の 1 回答のみである。

グループでの協議や地域の人との交流を意図的に計画的に学習の一環として行うことをより意識した学習内容を副読本に盛り込めば、「他者や社会とのかかわりに関すること」の回答も増えると考えられる。

本調査により、副読本の活用が協働的な学習にはあまり結びついていない実態が明らかになった。児童の変容があまり見られないところについて、指導法の改善が求められる。

4-2 教員の変容

自由記述回答を「指導方法」「指導内容」「意識の変化」の 3 つの項目に分け、内容が似ている回答をまとめて分類した（表 2）。

表 2 教員の変容（筆者作成）

| | 回答内容 | 3 年 | 6 年 |
|-------|--|-----|-----|
| 指導方法 | 見通しをもって計画的に指導ができる | 5 | 6 |
| | 思考ツールについて理解できた、整理・分析の手法がわかった | 2 | 5 |
| | 指導の手引きにより指導がしやすくなった、どのように指導すればいいかが分かった | 3 | 2 |
| | 探究的活動を進めやすい | 2 | 1 |
| 指導内容 | 宇治市以外の出身者でも宇治のことがよくわかる | 4 | 5 |
| | 教材研究の必要性がわかった | 1 | 1 |
| | 資料集としての活用ができる | 1 | 0 |
| 意識の変化 | 地域（宇治）への愛着がわいた | 1 | 1 |
| | 地域（宇治）に興味・関心を持てるようになった | 1 | 0 |

最も多い回答は、「見通しをもって計画的に指導ができる」という回答（11 回答）だった。これまで、小学校の総合学習は担任に任される

ことが多く、新年度を迎えるたびに総合学習をどのように行えばいいのか迷うことが多かった。全市共通の指導計画があり、副読本や指導の手引きがあることで、どのようなことを指導すればいいのかがわかり、指導者にとって指導がしやすかったことが分かる。

次に多い回答は、「宇治市以外の出身者でも宇治のことがよくわかる」という回答（9 回答）だった。宇治市では、教員の異動は京都府内であるため、宇治市以外の学校からの転出入もありうる。宇治のことを教員が知らない状況もあり、「宇治学」を実施する上での障害の一つとなっていた。一方で、宇治市出身、在住あるいは宇治市で教員を長くしていても、宇治のことを知らないこともある。指導の手引きには、教員が知っておくべき最低限の知識が掲載されているので、教員にとっても宇治のことを知る機会となっている。

カテゴリー別で最も多い回答は、指導方法に関すること（26 回答）である。最も多い「見通しをもって計画的に指導ができる」という回答の他、「思考ツールについて理解できた、整理・分析の手法がわかった」（7 回答）、「指導の手引きにより指導がしやすくなった、どのように指導すればいいかが分かった」（5 回答）などの回答が見られた。副読本作成の意図として、教員の指導力の向上があった。前述したように、総合学習で十分な探究的な学習が実施されていないという学校が見られた。これは学校の中には、総合学習で探究的な学習を行うことが必要であるという認識が低い学校があるということである。また、若い教員が増え、指導力が不足している教員が増えていること、経験年数の長い教員でも、変化の激しい時代の中で、新しい教育課題に取り組むことが難しいこと、多くの業務を抱え、十分な教材研究をする時間がないことなどが原因と考えられる。副読本、指導の手引き、ワークシートを一体的に提供すること

により、教員の負担が軽減され、一定の指導ができる状況はできつつあるといえる。

次に多い回答は、指導内容に関すること（12 回答）である。前述した「宇治市以外の出身者でも宇治のことがよくわかる」という回答の他、「教材研究の必要性がわかった」（2 回答）という回答があった。

副読本は学習内容をサンプルとして示している。地域によって、地域教材には違いがあるので、副読本を参考にして、地域の教材を開発したり、副読本に示されている内容を取捨選択したりする必要がある。事例が違っても「宇治学」でつける資質・能力は同じであることから、副読本によりどのようなことを学習しなければならないのかが明確になった。しかしそのことにより、副読本を活用するのは大変だという意識になり、副読本があまり活用されていない状況も見られた。

他には、教員の意識の変化に関する回答（3 回答）もあった。3 年生、6 年生ともに指導方法に関する回答が多かったことから、副読本は指導方法の改善に役立つと言える。

本調査により、副読本や指導の手引きにより、指導方法の改善や向上に役立つという意識が教員に強く働いていることが分かった。具体的にどのように指導が変わったのか、さらに詳細な分析が必要である。

4-3 実施上の課題

全市の小学校で副読本を活用した「宇治学」の学習が始まったことにより、実施上の課題も明らかになった。自由記述回答を内容が似ている回答をまとめて分類した（表 3）。

表 3 実施上の課題（筆者作成）

| 回答内容 | 3 年 | 6 年 |
|---------------|-----|-----|
| 体験的な活動等の時間の確保 | 3 | 5 |
| 体験・見学先の確保 | 4 | 3 |
| 学校独自の取組の検討 | 2 | 6 |
| 体験・見学等の計画・準備 | 3 | 3 |
| 外部講師・交通費等の費用 | 3 | 1 |
| 副読本の活用の仕方 | 2 | 0 |
| 学校体制・教員の確保 | 0 | 1 |

最も多い回答は、「体験的な活動等の時間の確保」（8 回答）だった。「宇治学」では、探究的な学習を行うにあたり、「課題設定」で、体験的な活動や見学活動を位置付けている。また、「情報収集」では、地域の実態に即した学習をするため、地域のフィールドワークをすることになっている。こうした体験的な活動等をするためには時間がかかり、これまでの教育課程の見直しも必要となる。副読本の使用が開始されたが、その準備がまだ十分整っていない学校もあることが分かる。

次に多い回答は、「体験・見学先の確保」（7 回答）だった。地域の中で体験・見学先を確保するため、地域の人材を掘り起こし、連携をしていくことが求められる。そのための準備が必要となる。関連して、「学校独自の取組の検討」（8 回答）、「体験・見学等の計画・準備」（6 回答）、学校体制・教員の確保（1 回答）があった。

本調査により、各学校の独自の取組の実施にはまだ十分になっていないことが明らかになった。

5 まとめと課題

副読本の使用が開始されたことにより、探究的な学習のモデルが示され、各学校の総合学習が一層充実することが期待される。それは今回の調査の「児童の変容」、「教員の変容」で、実践した教員も認識していることが分かった。

「児童の変容」では、資質・能力がまだ十分ではないところは、副読本の改訂の時に修正することも考えられるが、「宇治学」の実践するときに教員が意識することにより、運用面で改善できることも多い。今回の調査により、児童の資質・能力の育成で、どういうところが不十分なのかが分かった。

副読本を活用した「宇治学」は 35 時間で、残りの時間は学校独自の総合学習を実施すること、副読本の内容も学校、地域、児童・生徒の実態に合わせて柔軟に変更してもいいことになっている。しかしそれでも、新たな副読本による「宇治学」の学習により、学校現場では戸惑いが見られていることが、「実施上の課題」で明らかになった。

副読本を使って初めて気が付くこともあり、各学校、教員が気付いた課題を次年度に申し送ることにより、改善される課題もある。特に、体験、見学先の確保や計画・準備の方法などは、引き継ぎが可能である。毎年新しいことを行うのではなく、副読本を活用するからこそ継続的な取り組みができるので、教員にとっては指導がしやすい状況がつくれた。初めのうちは、副読本の内容を実践するだけで精一杯かもしれないが、副読本に縛られるのではなく、副読本の内容の趣旨を理解し、各学校の地域や児童の実態にあった「宇治学」を展開することが重要である。

今年度は、第 2 期の 4 年生と 7 年生（中学 1 年生）の副読本の使用が開始された。学年が変わることで新たな課題が出るかもしれないが、第 1 期の使用を踏まえ、改善していく必要がある。

付記

本研究は、科研費（C）17K048930001（研究代表者：橋本祥夫）の研究の一環として実施したものである。なお、本研究にかかわる部分の

研究については、筆者の担当として行っている。

引用・参考文献

- ・橋本祥夫，森正美，鷗飼正樹，寺田博幸，澤達大，市橋公也，辻弘一（2016）「官学連携による「宇治学」副読本作成と現場での活用に関する研究Ⅰ」『人間学研究』第16号，京都文教大学人間学研究所，15-37.
- ・橋本祥夫（2018）「総合的な学習の副読本作成による地域協働型教材開発と評価・改善に関する実証的研究—総合的な学習「宇治学」の実践上の課題—」『人間学研究』第18号，京都文教大学人間学研究所，31-44.
- ・文部科学省（2017）「小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編」東洋館出版
- ・望月耕太（2017）「総合的な学習の時間が持つ教育効果と課題」『心理・教育研究論集』第41号，神奈川大学，159.